

近代以降の吐噶喇列島における村落構造の変貌

— 宝島を事例として —

一 はじめに

近代以降⁽¹⁾、わが国は大きな変貌を遂げた。それには、西洋からの新技術の多量の導入が一つのメルクマールと考えられる。従来、鎖国という自給自足体制⁽²⁾をとっていたわが国に、それは大きな転換を生じさせることになった。この種のヨーロッパ・アメリカからのいわゆる近代化のインパクトは、まず最初に、その当時の政治・経済の中心であった東京・大阪・京都などの大都市に出現し、順次、地方中心都市さらには農山漁村にまで波及した。かような西洋からもたらされたインパクトを、本土とは距離的に隔てられている離島に求め、ここでは、それがどのような受けとめられてきたかという点に関して、具体的な検討を行なうというのがわれわれの小論の主目的である。

すなわち、この近代化のインパクトの波及が直接に、つまり一次的にその影響を受けたと思われる東京などの大都市とは異なり、その大都市という一次的な影響を通して、いわば二次的にインパクトを受けたと看做される地域においては、前者とは相違した影響が認められるのではないかという観点に基づいている。この事実は離島および山村⁽³⁾

田 畑 久 夫
紀 禎 哉
寺 本 陽 子

などでは西洋からのインパクトを受けた後においても、まだ多分に、伝統的あるいは原始的漁法とか農業形態などという述語で代表される近代以前の諸形態⁽⁴⁾が多数残存していることに起因していると考えられる⁽⁵⁾。つまり、このような状況 (situation) は他にも要因が考えられるが、現在における都市と農村——とくに離島および山村——との格差の一因とも考えられるのである。それ故、住民の流出などによる過疎対策に対処する場合、一考を要する問題を提示しているように思われる。すなわち、この種の問題は、解決するための根は深いといえるのである。とりわけ離島は山村と同様に、あるいはそれ以上に、現在でも交通の便が悪く⁽⁶⁾、その孤立性および隔絶性⁽⁷⁾は大きいと思われる⁽⁸⁾。

以上述べた如く、離島における孤立性および隔絶性を端的に表現する用語として、本稿では村落構造という術語を用い、それを分析することで離島を具体的に把握しようとした⁽⁹⁾。つまりこの用語は、わが国における離島の生業の基盤と看做される漁業・農業 (その基盤としての土地を含む) などを中心に、経済構造およびそこに居住する住民の家族形態などを中心とする社会構造を主たる内容とするものである。それはいわば、離島を複合体として把握しようとするものである⁽¹⁰⁾。したがって、以下における分析も、複合体を構成する部分複合体 (経済構造・社会構造など) の分析を通して、その変貌を検討しようとするものである。

二 地域の概略

吐噶喇列島⁽¹⁾は、鹿児島島の南方約二〇〇キロメートルに位置する口之島からさらに南約一一〇キロメートルの間に点在する島々である。これらの島々は、北から口之島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・小宝島および宝島の

このように、非常に交通条件の劣悪な吐噶喇列島ではあるが、現在では、わが国の一国経済体制の中にながちりと組み込まれている。それ故、若年層を中心とする人口流出が、他の離島・山村と同様にみられ、過疎問題・教育問題などが深刻である。

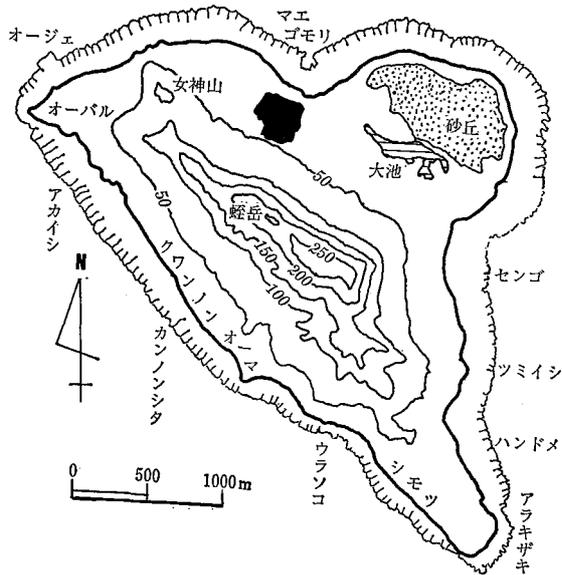


図1 宝島概念図

等高線の間隔は50m, ■は集落

七つの有人島と臥蛇島^{がび}・臥蛇小島・小宝島・横当島の四つの無人島より構成される。現在では、この吐噶喇列島は種々の変遷を経て、鹿児島郡十島村に属している。今回の研究対象である宝島は、上述した有人島の中では最南端に位置する周囲約一キロメートル余りの小島である。宝島から各地への距離は、鹿児島市三六六キロメートル、奄美大島の名瀬まで七〇キロメートルとなっている。交通の便は、飛行場が諏訪之瀬島に建設されているが、定期航路は開設されていない。したがって、村営船による運行が中心となっている。運行回数は夏季では週二回、冬季では月五回程度であり、村役場が位置している鹿児島市と各島とを結んでいる。

宝島の輪郭に関しては、『七島問答』巻八(3)には、

本島東面ヲ表トシ、西南ヲ裏トシ、裏面ハ一字様ニシテ、表面其左右ヨリ中央ニ至ツテ張り、殆ンド婦人の乳房形ヲ成セリ。と記されてるように、ほぼ三角形をなしている。集落は一島一村であり、図1にみられる如く島の北部に位置する。その背後には、蛭岳(二八九メートル)、イマキラ岳(一九一メートル)などの山々が連なり、東側は「サブク」と称されている大砂丘がある。人口は、吐噶喇列島全体と同様、減少傾向にある。この点は、他の離島および山村などでは近年よくみられるUターン化現象はまったくみられない(表1)。

表1 戸数および人口の推移

(戸数:戸, 人口:人)

	明治12年		明治30年		昭和7年		昭和28年		昭和39年		昭和45年		昭和57年	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
口 之 島	25	105	30	178	56	424	108	473	106	473	103	365	96	203
中 之 島	28	105	30	149	112	702	219	1,020	169	648	136	505	107	229
臥 蛇 島	13	68	18	99	21	101	11	51	11	45	8*	25	0	0
平 島	17	72	20	93	23	146	31	191	35	164	33	114	39	84
諏 訪 之 瀬 島	0	0	37	136	20	127	18	89	13	64	14	45	19	63
悪 石 島	27	118	28	137	33	169	33	172	36	170	34	141	33	83
小 宝 島	55	299	66	439	112	664	113	564	105	394	78	256	67	151
計	165	767	229	1,231	377	2,333	551	2,656	489	2,022	419	1,497	374	834

* 昭和45年末に全戸転出

〔十島役場資料から作製〕

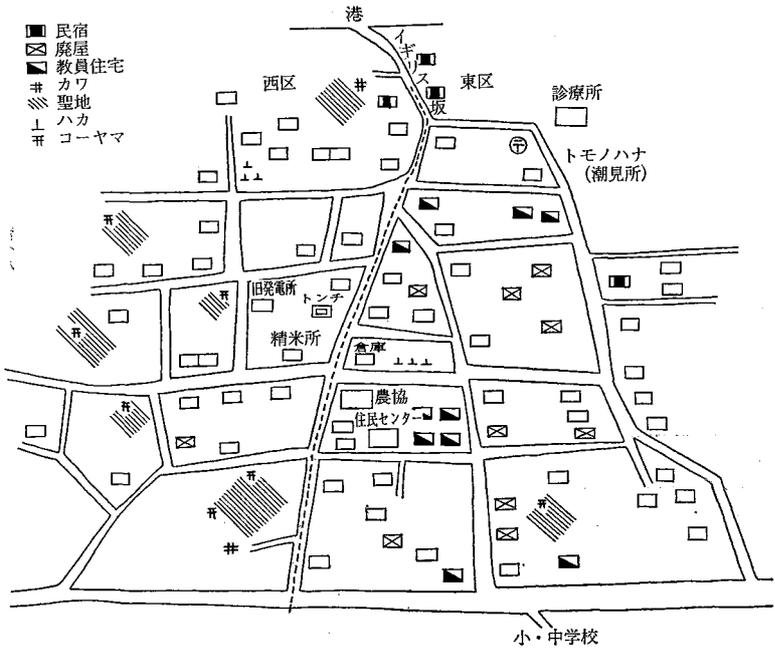


図 2 現在の家屋配置 (昭和57年)
〔現地調査により作製〕

注目すべき地場産業はなく、従来より行なわれている水稲を中心とする農業が経済の中心で、サトウキビ・甘藷などを自給的に栽培している。とくに水稲は、他の吐噶喇列島では自給困難な島々が多い中で、ほぼ自給可能であり、しかも天水による耕作を行なっている点に特色がある。漁業は、島の周囲にサンゴ礁が発達しているため良港にめぐまれず、現在では島内消費程度である。しかし以前においては、沖縄の糸満系漁民からの影響を受けた「追い込み漁」が行なわれ、現在でも潜水漁法による夜光貝などの採貝を中心に細々と営まれている。

宝島の歴史については、史料がほとんど存在しないため、詳細は不明であるが、前出の『七島問答』(14)には、

後終ニ平族ノ巢窟トナリシハ他ノ六島ト同ク尋

テ慶長以降蕃藩ノ鎮撫スル所ナリ

と記され、また『拾島状況録』(15)にも以下ののように著わされている。

本島亦平家隠匿ノ地ニシテ、平田ノ姓ヲ稱スルモノ皆其遺族ナリト稱ス。平田嘉之助ナル者系圖ヲ有ス。曰ク、新三位中将資盛ノ子兵衛太郎資宗母ニ抱レ、兵亂ヲ陸摩方ニ避ケ、七島ニ流落塾居ス云々、其家譜ナルモノ屢々改爲シテ、今ニ傳フト云フ、數年前亦改爲センモノアリ。本島ニ殆ンド讀ム能ハザル處アリ。

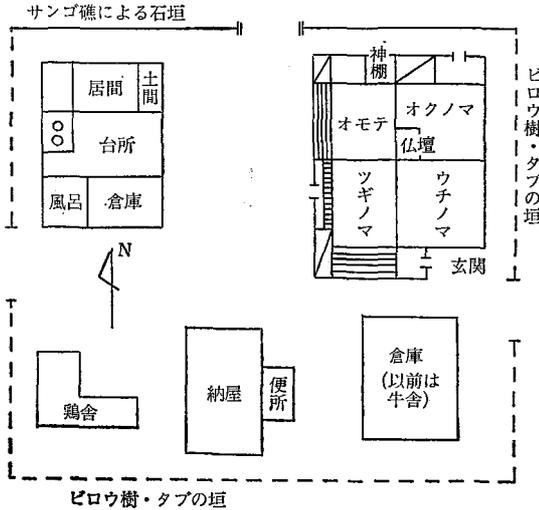


図3 宝島における民家の間取り

〔宝島 N. H 氏宅での間取から作製〕

これらの史料から判明するように、宝島にもわが国の他の山村や離島と同様に、平家の落人伝説が存在した。そして、その子孫と称する家系が島のトンジュ（島司・殿主）とよばれ(16)、明治初年まで島民を支配していた。集落は、琉球石灰岩よりなる高度約三〇メートルおよび五〇メートルの二段の段丘面上に立地している。ムラ全体は、防風林の機能を有する樹林の中に存在し、海岸からは、その全域を望むことはできない。島の唯一の玄関である港から、イギリス坂とよばれている緩やかな坂を約二〇〇メートルくらい登ったところに集落がある。その集落に入る手前すなわちイギリス坂の途中左手に宝島では「カワ」と称している泉が存在する。この種の泉は、ここ以外にムラ内に数ヶ所あり、飲料水などに用い

られている。とくに集落内で注目すべきものは、「コーヤマ」とよばれている聖域があげられる。そこには、ガジュマル・ビロウ樹・タブなどの亜熱帯植物が繁茂し、防風林の役割を果している。この聖域は、以前では、女性はもちろん禁止で、男性でも入所するときには履物を脱ぐという慣習があった。しかし、現在では、一部消滅しているという状態である。

この聖域とともに、宝島のムラの特徴を示す事例として民家の内部構造を検討しよう。一軒の屋敷地内はオモヤ・台所・納屋・便所・牛舎など、その機能に応じていくつかの建物から構成されていた。ここで注目させるのは、オモヤにある神棚と仏壇との位置である。すなわち、ウチ神を祭る神棚は本土という座敷に相当するオモテにあり、仏壇はオクノマあるいはウチノマに祭られているという点である。この事実は、神棚が仏壇より優位にあることを示し、ムラ内部にみられる聖域とならんで、宝島の神道の影響の強さを示すものといえよう。なお、オクノマは戸主夫婦の寝室であり、ウチノマは居間として利用されている。このように、敷地内に多くの建物をもつ宝島の民家は、道路に面した部分のみ石垣をつくり、その他の面はビロウ樹またはタブなどの亜熱帯植物を植えているだけである。したがって、他家との境界は判別しにくい。このことは、第四章で述べる土地所有と関係あるものと思われる。現在では、このような伝統的な民家は減少しており、本土と同様に、同じ建物に便所・納屋を付属させる形式が多くなっている。

現在では宝島の家屋配置図をみても明らかなように空屋が多い。このことは過疎化が進行していることを示すものである。その対策は種々考えられるが、ムラ内に存在する民宿などは、宝島の今後の姿を示す一例であろうと思われる。

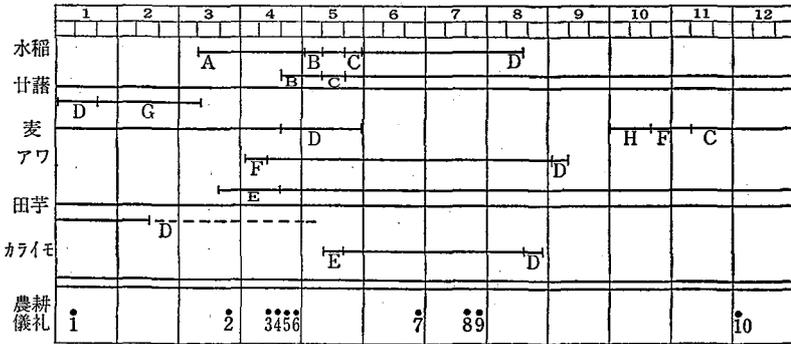


図4 農業カレンダー

A. 苗代, B. 田植, C. 中耕, D. 収穫, E. 植え付け, F. 播種, G. 製糖, H. 畑のこしらえ。
 1. サトウシンのヨウイ, 2. 麦のソコマ, 3. ソーリ, 4. サナボイ, 5. 中祈禱, 6. 麦の祭り
 7. ソコマ, 8. 田の神祭り, 9. シアゲ祭り, 10. クワイレ。

〔開取りにより作製〕

三 宝島における経済構造の変遷

(一) 農業の変遷

吐噶喇列島における農業は、図4にみられるように多種のものが栽培されたが、それらは、自給零細的に婦女子によってのみ行なわれていた。しかし、宝島は例外的に水稻栽培なども行なわれ、多様に富んでいる。そこで本章では、江戸時代以降を以下の三期に区分し、農業の変貌について考察を行なう。

第一期 まず第一期は、薩摩藩による支配の時代および明治一八年（一八八五）における地券発行以前であり、この時期は本島の農業の出発点ともいえる時期である。

元来、宝島は漁撈生活に依存してきた島であるが、これを農業中心の生活システムに変貌させたのは、文政一二年（一八二九）における奄美大島からのサトウキビの導入(17)である。それ以前の農耕としては、自給的な水稻栽培・焼畑(18)・甘藷栽培および儀礼食として田芋栽培(19)が中心となっており、換金可能なものとしては、大池（宝島では「イケ」と称す）に自生しているシチトウイ(20)が

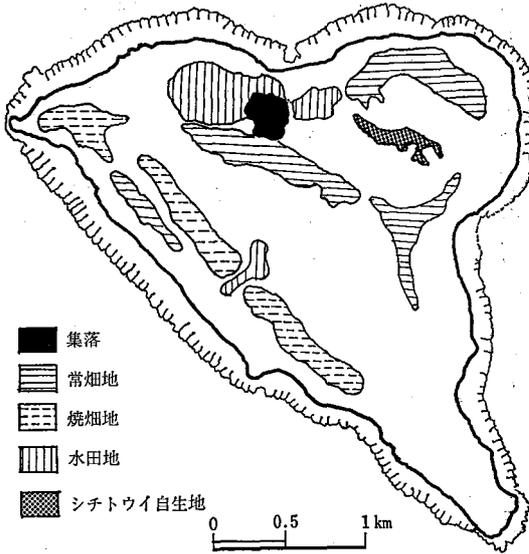


図5 宝島の戦前における土地利用

〔現地調査により作製〕

表2 明治27年の宝島農産物作付表

種目	収 穫 量	作 付 面 積
砂糖	64,380斤	11町6反4畝 歩
米	87石4斗1升3合	15.8.1.25.
甘藷	49,875貫	19.
大麦	7石4斗2升	1.2.8.10.
裸麦	17.5.	2.5.
小麦	33.	4.5.
餅米	13.2.5.	2.6.5.
蕎麦	29.	3.6.2.15.
粟	9.	1.8.
菜種	2.9.	不明
蘭苳	109枚	不明

蘭苳は大池に自生のものを利用のため作付面積不明。

〔『拾島状況録』から作製〕

らいであり、またこれは苳に加工され、薩摩藩に貢物として送られていた。しかしサトウキビの導入以降、サトウキビは黒糖に加工され、明治一六年（一八八三）には九、六〇〇斤、金額にして一、〇八〇円⁽²⁾が鹿児島に移出され、その代わりに日用雑貨品が本島に移入されている。このように、ほとんど経済的価値を有さなかった農業が、サトウキビ導入というインパクトを受け、島の基幹産業へと変化してきたのがこの時期であろうと考えられる。

第二期 「門地割り」と称される土地制度の施行

（明治一八年）から第二次世界大戦後のアメリカ合衆国統治下におかれた時期を第二期とした。その理由と

しては、門地割りによる地券発行によって、農業経営などに大きな変化がみられた時期だからである。

図5および表2は、明治中期の宝島の諸相を表わしている。それによれば、本島では標高約五〇メートル以下の隆起珊瑚礁面に水田が存在している。当時より本島では、水田の用水を降雨および「カワ」に一〇〇%依存しており、湧水池付近は「ムタ」とよばれ田芋が栽培されている。畑には常畑と焼畑があり、前者は主としてサトウキビや甘藷などが栽培されている。とくに「サバク」では広く甘藷が栽培されている。後者の焼畑は、現地では「アワヤマ」ともよばれ、島の西南部（オーバル）および南部（オーマ）の山麓斜面（五〇〜一〇〇メートル）部で行なわれ、主としてアワ・ソバ・オオムギ・ハダカムギなどが自給的に栽培されていた。またこの時代においても、大池のシチトウイの利用もみられる。このように、近代初頭における宝島の農業形態は、第一期のそれとほとんど変化のないことが判明した。

しかし、門地割りにもなる地券発行以降、農業形態には大きな変化がみられた。門地割りとは、明治一八年に大蔵省布達に基づいて、当時五八戸の農家のうち五一戸が、水田を六反三畝、畑を一反二畝一六歩（これを一門^二ヒトカドとよぶ）、残りの七戸（主として小宝島・奄美大島からの移住者）が、その半分の水田三反一畝二六歩、畑六畝九歩に土地を分配する制度であり²²、この施行によって、トンジュウを頂点としたユープニ制と称するムラ共同体的規制が崩壊し、多様な変化がもたらされた。たとえば、江戸時代において共同体規制のために困難であった分家の形成を可能にし、ひいては土地の均等分配を引き起こし、耕地の零細化または島外への出稼ぎを促進する要因ともなった。それ故に、農業面においては、農業労働者を多く必要とする焼畑耕作やサトウキビ栽培などが衰退の一途をたどる結果となった。図6および表3は復帰直後における土地利用とそのうちわけを示している。それらによれば、前述

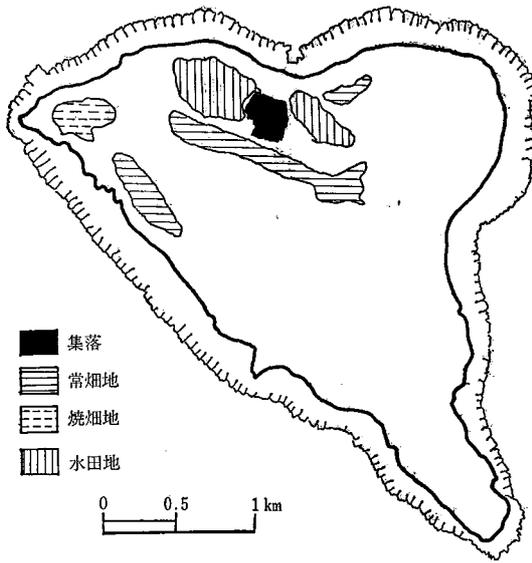


表 6 宝島の本土復帰直後の土地利用
〔現地調査により作製〕

表 3 昭和30年の宝島農産物作付表

種目	収穫量	作付面積
水稲	345石5斗	28町 7反 畝
小麦	8. 5.	7. 0.
甘藷	87,640貫	31. 3.
甘蔗	77,500斤	3. 1.
落花生	18石6升	2. 5. 8.
大根	3,600貫	3. 6. 6.
蔬菜	792貫	7.

〔十島村役場資料から作製〕

時期から現在に至るまでとした。その理由としては、昭和二七年の本土復帰後、わが国の高度経済成長の影響を受け営農形態に変化がみられた

の要因による労働人口の減少に加えて、合衆国統治に嫌悪する人々の流出なども加わり、伝統的農業の象徴であったサトウキビ栽培が二町八反九畝（明治二七年の面積の二一％）にまで激減した。また同様の現象は焼畑耕作においてもみられ、島の南部の焼畑地が放棄され、この時期において統計よりアワ・ソバ・オオムギ・ハダカムギなどの焼畑生産物が消滅している。また換金のためのシチトウイの利用が消滅したのもこの年代と一致することが現地調査より判明した。このように第二期においては、当初は近代以前とほぼ同様の農業が営まれていたと推定されたが、それ以降は、門地割りにともなう地券発行というインパクトを受けて、耕地の零細化および労働力の減少による伝統的農業形態の衰退がみられた時期といえよう。

第三期は、合衆国の統治から開放された

からである。

図7および表4は、現在の土地利用と作付面積の実態を示している。それらによれば、耕地（とくに水田）では荒地地化したものが多くみられ、わずかに五三一アール（昭和二九年の約二〇％）が栽培されているにすぎない。また畑地においても焼畑が完全になくなり、常畑では個々の作付面積がさらに縮小している。とくに、文政一二年（一八二九）の導入以来、農業の中心的存在であったサトウキビ栽培もわずかに四三アール（昭和二九年の一四・八％）のみが栽培され、換金能力を失っている。それに対し

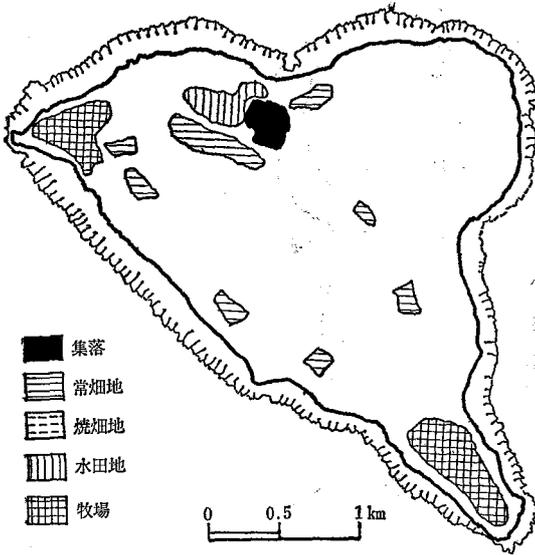


図7 宝島の現在の土地利用
〔現地調査によって作製〕

表4 昭和56年の宝島農産物作付表

種目	収穫量	作付面積
水稲	12,150kg	531 a
甘藷	23,600	118
馬鈴薯	1,400	14
落花生	263	64
大根	420	22
キウイ	670	11
甘蔗	21,500	43

〔十島村役場資料から作製〕

住民の食生活の向上がみられ、戦前では栽培されなかった野菜（ジャガイモ・ダイコン・キャベツ）などの栽培が試みられたが、これらも換金作物にはなりえていない。

以上のよう
に復帰後の第
三期において
は、伝統的自
給農業がほぼ
消滅したとい
ってよく、わ

ずかに残存するものといえ、儀礼食のための田芋栽培と零細的なサトウキビ栽培であるといえよう。そしてこの原因には、高度経済成長にともなう進学率の増加による若年労働者の島外流出や孝家離村などが考えられよう。

これに対し、現在、行政側では、かつて焼畑耕地であったオーバルなどにおいて島民の生活向上を目的とした畜産の導入を試みており、島民の主とした現金収入源となっている。

(二) 漁業構造の変遷

吐噶喇列島周辺の海域は、普通「七島灘」とよばれ、沖縄より北上した日本海流が幾筋もの奔流をなして東西に流れている。暖海性の魚族をもたらす黒潮の影響に加え「曾根」と称する浅瀬が多いことから、付近はカツオをはじめ水産資源の豊かな漁場として知られてきた。

吐噶喇列島の生業は確かに半農半漁であるが、どちらへ重点が置かれるかは、島によりあるいは時代により異なっている。宝島の場合、従来より飯米が自給可能なこともあって、比較的農業主体の性格を有していた。現在では島内消費的な漁を若干行なっているに過ぎない。したがって、本節では宝島も含め、吐噶喇列島全体における漁業の変遷をみていきたいと考える。なお、時期の区分は農業の場合と同様とする。

第一期 薩摩藩時代の吐噶喇列島では、漁業とりわけカツオ漁が極めて大きな意義を有していた。当時、年二、三回鹿児島とを結ぶ「年貢船」に島の特産品を積み込んでいたが、数少ない換金生産物ともいえるカツオ節は貢納品の中でも重要だったからである。『七島問答』によれば、藩政期の貢租として生産されたカツオ節は、属島の小宝島も含め宝島が九、四一八本と最も多く、続いて平島二、八八〇本、口之島二、七二六本、中之島・悪石島・臥蛇島の順になっている²³⁾。

赤堀廉蔵(27)・笹森儀助(28)らの記録によると、幕末から明治にかけて、九州の串木野・坊泊・枕崎・山川を根拠地とする漁民が当海域へと出漁しはじめた。『拾島状況録』口三島竹島の項には、

松魚ノ漁方へ往古ヨリ小雜魚ヲ餌トシ、七島の如ク角餌ヲ用ヒス。…略…鹿籠枕崎ノ漁船此近海ニ來リ、餌雜魚ヲ漁シ、去リテ拾島海ニ漁ス

と記述されているが、薩摩半島より吐噶喇へやってくる漁船は小雜魚を竹島付近で漁獲し、カツオの撒餌に当てていた(29)。これに対し、吐噶喇においては依然として伝統的な角製の擬似針を用いていたため、漁獲は急速に減少した(30)。このように、新しい漁法を擁した本土のカツオ漁船による七島灘の漁場開発が、吐噶喇列島の漁業に及ぼした影響は大きいといえよう。

では、宝島の場合どうだったのだろうか。『七島問答』(28)によれば、

其男女一村擧テ事ヲ耕作ニ従事ス。…略…故ニ其民此海島ニ生レテ甚水上ニ熟セス。釣業ノ如キハ年中自己ノ食用ニ供スルニ過キス

とあり、農業従事が島民のおもな生産活動で、漁業は自己消費のみであった。先に紹介した貢納品のカツオ節生産でも、
本島一歳松魚ヲ捕ラス。故ニ堅節ナシ。其貢物納無實ノモノヲ出セリ
という状態である。しかし付近は、

其海固ヨリ松魚ニ富マサルニ非ス。…略…云ハム水屬ノ巢窟ヲ成セリ(29)

と記されるほど魚の豊庫であった。白野夏雲は、宝島の漁業が不振なのは「船着」の險悪さに由来するからであり、船着の岩石を除去して便宜をはかることを主張している(30)。

なお、『拾島状況録』には各島の漁船所有形態が記されているが、宝島の二隻のカツオ漁隻は島中共有で、ムラ共同体の性格をよく示すものである。

第二期 この時期において特筆される点は、トビウオ漁の開始と個人漁業の萌芽である。

トビウオ漁は、現在でも悪石島の経済をある程度担っており、五年ほど前までは、吐噶喇一帯で盛んに行なわれていた。しかし、『拾島状況録』に全く触られていないことから、少なくとも明治二九年以降に開始されたものと考えられる。この問題について、斎藤毅は明治末ないしは大正初期に諏訪之瀬で発生したのではないかと推察している⁽³¹⁾。水揚げされたトビウオは、内臓を取った後、塩干加工され、鹿児島に出荷した。なお、宝島ではほとんどトビウオを産しない。トビウオはカツオと同様に、長い間吐噶喇の代表的な移出物であった。

「イツタケ」⁽³²⁾を用いたカツオの共同漁業組織が崩壊し、「丸木舟（刳舟）」使用の個人漁業へ移行したのも、ちょうどその頃である。たとえば、悪石島の場合『島嶼見聞録』には、

釣舟ハ六艘アリテ、毎艘一五歳ヨリ六十歳ノ男子六名、若クハ八名ヲ載ス。獲ル所ノ魚ハ乗組員ニテ平分ス

とあり、ユープニ制による共同出漁と平等分配の状況がよくわかる。それが個人漁へかわったいきさつについては、早川考太郎の報告に詳しい⁽³⁴⁾。彼の論旨に従えば、明治四一年漂着した丸木舟で単独カツオ漁へ出かけた男が、すべての漁獲物を自分のものにできることに驚き、個人漁業の発生に結びついたという。もちろん、近年まで「ポッコミ漁」と称する共同漁もわずかに残存していた。

さて、宝島にはカツオの共同漁業組織が存在しなかったかわりに、糸満系漁民の指導を受けた「追い込み漁」⁽³⁵⁾が行なわれていた。『拾島状況録』の中に、

	漁業 戸数	漁船 隻数	0 10 20 30 40 50(トン) 漁獲量						
			シジ	カツオ	サワラ	その他			
口之島	6戸	6隻	シジ	カツオ	サワラ	その他	36.2		
中之島	13	13	シジ	カツオ	サワラ	その他	39.2		
平島	4	4	サワラ クロダイ シジ	その他	9.4				
諏訪之瀬島	7	7	サワラ クロダイ イカマツ	その他	14.7				
悪石島	10	10	とび ウサ			サワラ	カツオ	その他	52.8
小宝島	8	8	潮魚 クロダイ シジ	その他	16.1				
宝島	9	9	クロダイ 夜光貝	カツオ	その他	23.6			

(十島村役場資料より作製)

図 8 十島村の漁業 (昭和54年)

〔十島村役場資料から作製〕

小寶島ハ永良部鰻多シ。…略…毎年久高人来漁ス。
寶島近海亦鱒甚タ多ク、糸満人來リテ漁ラス

と記載され、明治中期に沖繩の漁民の来島を示している。
また小宝では一時彼らの定住もみられたことや、大正年間
末に「追い込み漁」が衰退したことも現地調査で明らか
になった。

第三期 戦後は、個人の自家消費的な漁業が一層進展
し、吐噶喇漁業の基軸をなすカツオ漁とトビウオ漁を除け
ばまったく不振である、換言すれば島内消費のみへと衰退
した。これは離振法などの土木工事にもない、現金収入
を得る機会が増大したのも一つの理由であろう。また近代
的漁業施設の遅れもそれに拍車をかけている。

宝島で現在漁業をおもに行なっているのは、わずか二人
に過ぎない。彼らはウエットスーツを着用して周辺へ潜
り、イセエビや夜光貝を捕獲する他、多種の魚を突いてく
る。また好天であれば、魚族の豊富な小宝島へ足を伸ばす
こともしばしばであり、水揚げした魚介類はそれぞれ経営

する民宿で消費される以外に、島民へ分配・販売される。

いずれにせよ、自給的色彩の濃い宝島の漁業は、相変わらず日常の惣菜をまかなう段階である。

四 宝島における社会構造の変貌

(一) 土地所有形態

村落構造を地理学の立場から解明していく場合、まず、その景觀(36)に注目する必要がある。村落景觀の構成要素としては、民家・道路・水路状況を含めた集落全体の平面形態・防風林の有無・耕地や山林の分布などがあげられる(37)。これらの中でも、宅地とその周辺を取り巻く農地の形態は、村落構造の歴史的背景や社会的条件に反映しており、限られた面積の土地しか存在しない離島においてはことに重要である。

吐噶喇列島の住民は、既に述べたように、主穀を得るための農業として焼畑耕作を営んできた。それは、たとえば石川県白山山麓などに比較的遅くまで残存していた商品作物型のタイプとは異なる伝統的な完全自給型の焼畑である。こうした焼畑農業は強力なムラ共同体規制によって支えられていた。したがって、島の土地制度を明らかにすることはムラの社会関係や構造の把握につながるというよう。

宝島は比較的天水に恵まれ、吐噶喇列島の他島に比して水田が多い。しかし、かつてはその一方で零細な焼畑が行なわれていた。そこで本章では、宝島の土地所有形態について、変遷の跡をたどる。

第一期 江戸時代を通じて薩摩藩の支配下へ置かれた吐噶喇列島も明治八年(一八七五)には在番所が廃され、近代化の一步を踏み出すことになる。

明治以前における土地所有形態に関する文献は、われわれの知るかぎり存在しないが、旧薩摩藩で著名な「門割制度」という独特な土地制度が一般に行なわれていたことから、おそらくこれに類似した制度が実施されていたと推定される。これに関しては、昭和一五年に同地を訪れた桜田勝徳も、「この島は明治一八年まで薩摩の門割りと呼ばれる地割制度のまま残されていたが……略……」と記されている(38)。ところが同行した宮本常一は、「島の村落組織を一変せしめたのは藤井休助である。藤井休助は旧鹿兒島藩士にして、……略……島民全体の幸福のために、共同地以外を平等分配する門割りを唱導した」と報告しており、桜田とは異なった見解を示している(39)。宮本に従えば、藤井休助の来島により初めて宝島の門割りが施行されたわけで、江戸時代には地割制がまったく行なわれていなかったこととなる。しかし、中之島においても、門の存在を推測させる資料が鳥越皓之の手で紹介されており(40)、桜田のいうように、宝島でも何らかの門割りはみられたであろうと推定される。

けれども土地の私有意識は全体的に低く、宅地や水田は別として、土地の大部はムラ共有地(一島共有地)として意識されていたことが判明した。

第二期 先項で論じた在番所の廃止に続き、地租改正が行なわれた。これは地券を交付し、農民の土地所有権を承認するもので、これにより近代的税制が確立したのである。

宝島の場合、「……略……この年各家が個別に地租を負担し得る。明治以来の新しい体制をここでもうち出すために、島の主な耕地と宅地の家別な所有権をきめる最後の地割が官の手で行なわれ、それによってその地券が交付された」(41)。すなわち旧藩時代以来実施されてきたと推測される割替の最後として地租改正が実施されたわけであり、『拾島状沈録』に先述したように記されており(42)、この門割りによる門の総数五五門半は今日もなお固定化されている。

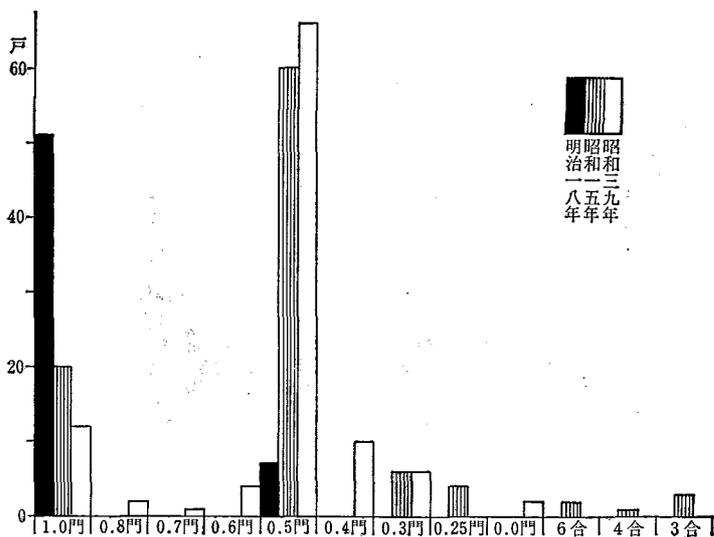


図9 門構成の変化

さて、地租改正は宝島の社会へいかなるインパクトを与えたのであろうか。まず平等分配を原則とする土地私有が認められ、各耕地の所有者が明確になったこと、共同体的規制により困難であった分家の創設が容易になったこと、二点があげられよう。たとえば地租改正の行なわれた明治一八年以降の戸数は急激に増加し、戦後の最盛期にはおよそ二倍に達している。また、分家の輩出状況は、桜田の調査(44)と対照すれば歴然と判明する。当時、宝島の戸数は一〇二戸(うち明治一八年の門と関係するものは九六戸)であり、その中で分家を出した家のタイプを分類すると以下のようになる(45)。これらの例はほとんど次男分家であり、門の分割にともない耕地の零細化の進行がみられる。

(a) 昭和一五年までに分家を一軒出し、本分家ともに半門ずつを所有しているもの二〇例(四〇軒)

(b) 昭和一五年までに分家を二軒出し、その本分家とも三軒いずれも半門を所有するもの、したがってその合計は一門半になるが、その半門をいづれから求めたかは不明のもの

の……二例（六軒）

(c) 昭和一五年においても麥わりなく一門を所有するにかかわらず、半門を持つ分家二軒を出しているもの……一例（三軒）

(d) 昭和一五年までに分家二軒を出し、本分家とも三分の一門ずつになっているもの……二例（六軒）

(e) 昭和一五年までに分家三軒を出し、本分家とも四分の一門ずつになっているもの……一例（四軒）

(f) 昭和一五年までに分家一軒を出し、本家六合門、分家四合門になっているもの……一例（二軒）

宝島の平坦地は、大半が水田や常畑に利用されているが、島の最高峰イマキラ岳の山麓斜面では、依然として焼畑がなされていた。地租改正後も門割りされた田畑と宅地以外は一島共有地として残存したのである。しかし、常畑の少ない分家は、耕地の細分化が進むにつれ、焼畑地を常畑化して長期にわたり耕作することも認められていた。

第三期 第二次世界大戦以降、人口は一時的に急増するが、その後は急激に減少した。焼畑耕作も昭和二五年ころを境として衰退し、昭和三五年ころ以降は中絶している。次・三男はもとより長男までもが島外へ流出する状態で、集落より離れた耕地は放棄されていた。

その反面、離島振興をめざす村の若手によって放牧場が開墾されており、かつての一島共有地の新たな再生がみられている。

(二) 行政組織および宗教構造の変遷

宝島に関しては、従来から民俗学者(46)などによって調査が進められ、多くの業績が認められる。そこで本節では、既存の文献および現地調査に基づき、行政組織および宗教構造の変貌を考察する。

近代以前において、宝島の行政組織および宗教組織の頂点に立っていたのは、既に論じた如く、平家の末裔として「トンチ」とよばれている家であり、そのトンチを頂点として、身分階層制⁽⁴⁷⁾が施行されていたと推測できる。その理由としては、宗教面で女性の神役のヌーシのうち、必ずトンチの家系から選出されるヌーシ（これを「キミガミ」という）は他のヌーシよりも一段上とされていることや、夏大祭や霜月祭では、トンチおよびその分家を中心に展開⁽⁴⁸⁾されていること、加えて、平家堂において他の姓の守り神を合祀し祀っていることがあげられる。

以上のように、近代以前ではトンチを中心とした身分階層制社会であったが、明治八年になって前項で論じたように「門地割り」が施行されると、島民の間に平等性が認識され、トンチの世襲的な優位性は崩壊し始めた。たとえ行政面では各戸の代表者によって総代が選出され、島の重要な事項に関しては、その下におかれている評議員および島民全体の会議（現地では「イットウカイ」とよばれる）によって決定・実施されるようになった。また宗教面においても神区長が選出され、祭祀を司っており、トンチの優位性の痕跡は、屋敷内にある高倉様式のシヨンジャが先述の大祭の齋場となる点にみられるのである。このように門地割りにともなう平等認識によるトンチの権威低下は、身分階層社会の崩壊をもたらし、行政面では総代、宗教面では区長というように双系的な構造を形成させた。

しかし、このような組織等も第三期にあたる本土復帰以降は過疎化の影響を受け存続が困難となり、宗教組織は昭和四五年ころから女性神役であるヌーシの成り手がいなくなり、昭和五五年に至っては男性神役がヌーシを兼任し、昭和五六年度に神役が廃止されるというように、完全な崩壊⁽⁵⁰⁾がみられた。また行政組織においても一部の解体が進行している⁽⁵¹⁾。

五 五 五
ま
ま
と
め

これまで、吐噶喇列島宝島を事例として、近代以降の村落構造の変貌を、主として農業および漁業などの経済構造

	第 1 期		第 2 期		第 3 期	
	藩政時代	明治~大正時代	昭和 (戦前)	占領期	昭 和 戦 後	昭 和 後
土地制度		明治18 地券(門地割)				
主要農作物	タイモ					
	カライモ					
	ムギ			-----		
	米					
漁業	サトウキビ	文政12				-----
	追い込み					
	潜水					-----
畜産(肉牛)						
大島紬						昭和40
電力						昭和52
水道						昭和30
定期船				-----		

図10 産業面からみた村落構造の変貌
〔破線は全域に及んでいないもの〕

・ 土地所有形態、宗教形態を主内容とする社会構造の分析を中心に所論を展開してきた。
しかし経済構造の分析においても、たとえば奄美大島より技術導入した大島紬などの家内工業、あるいは村の指導の下に導入された和牛の放牛・飼育などは、社会構造の分析のさいに論じなければならぬと思われるが、現在は消滅してしまっているヌーン制などの住民の意識の中に残っている側面とともに、今後のわれわれの研究課題としたい。以上にみられる不備は存在するのであるが、宝島における村落構造の変貌は、解明できたと考えている。この点を変貌モデルを作成することによって再確認し、そのことから、宝島の今後

の展望を検討しようとするものである。かかる意味で作製したのが図10である。

この図10にも示したように、近代以前はユープニ制と称される共同体に規制されていた宝島は、明治一八年の地券発行によって土地が個人私有となり、その状態が第二次大戦終了まで継続するのである。このことは原則的には土地の売買が自由となったので特定の個人への土地の集中・分散を生じさせた。このような状態は、第二次大戦後に実施された農地改革後も同様で、ただ地券自体の効力がなくなっただけであった。とくに昭和四〇年以後、宝島に大型定期船が運行されるようになると、急速に若年層の人口流出が増加し、現在に至っている。以上論じた土地制度に基本的に規定されているのが、宝島における農業および経済構造であったといえる。そしてそのような形態を裏面からバックアップしていたのが宗教を始めとする精神構造ではないだろうか。このようなものが消滅あるいは解体しつつある現在においては、宝島独自で将来の展望を切り開いていくことは非常に困難であると思われる。けれども、たとえば民宿などの観光客の誘致は一つの方法であろうと思われる。しかし、とても宝島の将来の展望を切り開くものとはならないと推定できる。政府・県・村の三者が一体となった対策が緊急に望まれる。

〔付記〕

調査にあたり種々御世話になった鹿児島郡十島村経済課、同教育委員会ならびに平田健一氏を始めとする宝島の皆様に謝意を表します。またわれわれ三者が所属している大阪市立大学・大阪教育大学・奈良女子大学地理学教室の諸先生方には、とくに深謝します。なお、一、二、五は田畑、三の(一)、四の(一)は紀、三の(一)、四の(一)は寺本がそれぞれ分担し、最後に田畑が全体を統一した。本稿の骨子は、歴史地理学会第二五回大会（於・横浜国立大）で口頭発表した。

この小論を、われわれ三名の共通の恩師である小林博教授の停年記念論文集に謹んで献呈いたします。

注・参考文献

- (1) 本来であれば近代という述語を厳密に定義しなければならないが、ここでは便宜的に明治時代以降と限定しておく。
- (2) もちろん、長崎の出島を中心に若干の貿易も存在していた。
- (3) 山村の定義などの山村自体の性格に関しては次の論文を参照。田畑久夫(一九八二)「わが国における山村の地理学的研究に関する諸問題―その概念と実践―」『女子短期大学紀要一八、一四七―一七五頁』
- (4) 原始的な漁法である潜水漁法による漁業が生活の基盤となっている海士集落や、近年まで木地製作を主たる生業としていた木地屋集落などは、かかる諸形態が残存している典型的な例である。この点に関しては次の諸論文を参照。田畑久夫(一九八二)「わが国における海士集落の変貌―五島列島宇久島平を事例として―」『歴史地理学紀要二四、六九―一〇〇頁』
田畑久夫(一九八一)「奥三河における木地屋集落の変貌―井山を事例として―」『歴史地理学紀要二三、二二五―二四九頁』
大都市においても、西洋からのインパクトを受けた後、全く近代以前のもものが消滅してしまっただけといっているのではない。それは程度の問題であり、離島および山村の方がより多く残存しているということを指摘しているのである。
- (6) たとえば南西諸島の離島では、台風が来襲すると一〇―一四日くらい船が欠航する場合もある。
- (7) わが国の山村における孤立性・隔絶性に関しては、次の論文を参照。田畑久夫「九州における隔絶山村の変貌―椎葉村を事例として―」藤岡謙二郎監修『日本地誌ゼミナル 九州・南西諸島』所収(大明堂、近刊)。
- (8) 例外も存在する。藪内芳彦の指摘する如く、江戸中期から明治前期においては、北廻航路のメインルートにあたっていた離島(飛島・粟島・佐渡など)は、本土の農村以上に貨幣経済が発達していた。藪内芳彦(一九七七)『島―その社会地理―』(朝倉書店)、四頁
- (9) 離島の村落構造に関しては、次の論文を参照。大村肇(一九五七)「漁村の構造」木内信蔵他編『集落地理講座、第二巻発達と構造』所収(朝倉書店) 一七八―一九五頁。
- (10) 離島を複合体として把握する方法は、次の書物によった。前掲(5)三―六〇頁。なお、地理学における複合体概念に関しては、以下の論文を参照。松田信(一九七二)「地理的複合体概念の展開」人文地理二三一、七四―九〇頁。
- (11) 別名川辺七島または七島灘。この場合七島とは、口之島・中之島・臥蛇島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島をさす。
- (12) 昭和四五年に全戸離村、廃村となる。
- (13) 白野夏雲(一八八四)『七島問答』八七―八頁。

- (14) 前掲(13) 七八頁。
- (15) 笹森儀助(二八九五)『拾島状況録』『日本庶民生活史料集成』第一卷所収(一九六八、三一書房 二七九頁)。
- (16) その子孫は、図2に見られるトンチである。
- (17) 前掲(15) 二八〇頁。
- (18) 本島での焼畑は、常畑を作り出す手段として焼かれた傾斜地で個人的に行なわれていた。
- (19) 主として通過儀礼に用いられる。
- (20) 地縁的な組織(クミ)によって刈り取られ、平等に配分されていたことが現地調査によって明らかになった。
- (21) 前掲(13)
- (22) 前掲(15) 二八〇頁。
- (23) 前掲(13) 四五〜八二頁。
- (24) 赤堀廉蔵(二八八五)『島嶼見聞録』、鹿児島県立図書館蔵
- (25) 前掲(15)
- (26) 前掲(13)
- (27) 前掲(15)
- (28) 前掲(13) 八二頁。
- (29) 前掲(13) 八二頁。
- (30) 前掲(13) 八二頁。
- (31) 斎藤毅(二九七四)「吐噶喇列島における漁業の特性」鹿児島地理学会紀要二二―二、六三頁。
- (32) 何枚かの杉板をおもに用いて作られた小型漁船。
- (33) 前掲(24)
- (34) 早川孝太郎(一九三六)「悪石島見聞記」民族学研究二、六七五〜七二六頁。
- (35) 前掲(15) 二八二頁。
- (36) 集落を景観論的な立場から考察した代表的な書物としては、次の著作を参考。 辻村太郎(一九三七)『景観地理学講話』

- (古今書院)。能登志雄(一九五二)『聚落の地理—景觀論的手法による聚落地理の研究—』(古今書院)。
- (37) 矢嶋仁吉(一九五六)『集落地理学』(古今書院、一〇〇頁)。
- (38) 桜田勝徳(一九六六)『鹿児島県大島郡十島村宝島—日本民俗学会編『離島生活の研究』(図書刊行会)九一—三頁。』
- (39) 宮本常一(一九七四)『宝島民俗誌』宮本常一著作集十七『宝島民俗誌・見島の漁村』所収(未來社、二二頁)。
- (40) 鳥越皓之(一九八二)『トカラ列島社会の研究—年齢階梯制と土地制度—』(茶の水書房)一九六頁。
- (41) 前掲(38) 九一—三頁。
- (42) 前掲(15)。
- (43) 『拾島状況録』の門数を合計すると五十四門半にしかない。しかし、桜田勝徳によれば、明治一八年の一門所有者五十三戸・半門所有者五戸で、前者に記載してある合計数五十五門半と一致する。
- (44) 前掲(38) 九二—九五二頁。
- (45) 前掲(38) 九一四—九一五頁。
- (46) 伊藤幹治(一九六一)『宝島の社会と宗教の構造的な理解』国学院大学日本文化研究所紀要八、五八—九五頁。伊藤幹治(一九六一)『宝島の宗教構造の諸相』日本民俗学一八、一一—一八頁。長沢和俊(一九七三)『宝島民俗誌』鹿児島短期大学紀要七、五三—七〇頁。牛島盛光(一九六六)『トカラ列島・宝島の祭祀組織と社会・経済構造』熊本短期大学論集三三号、一—二八頁。前掲(39)。
- (47) トンチの家を頂点とし、琉球よりつれてこられたといわれる家に至るまでの階層制が存在する。またこの点に関しては、前掲伊藤幹治の論文にも示されている。
- (48) たとえば、大祭では神楽が行なわれるが、その順序はトンチを中心として行なわれる。
- (49) 前掲(46) 長沢和俊 五五頁。
- (50) 昭和五十六年度、岩下憲雄・岩下文雄の両氏が最後の神役となった。
- (51) たとえば、地縁組織「クミ」と総代との連絡役とされていた「触れ役」が消滅している。